

武内辰郎詩集皮膚と対話と

皮膚と対話と 定価 一二〇〇円

一九七一年九月二十三日 発行

著 者 武 内 辰 郎

発売者 井 村 寿 二

東京都千代田区神田駿河台二ノ三

印刷所 千曲印刷株式会社

東京都千代田区神田駿河台二ノ三

発売所 勁 草 房

電話 〇三―二九四―六二二一

振替 東京 一七五二五三

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

武内辰郎詩集
皮膚と対話と

序

武内辰郎の最初の詩集である。そして僕は、はじめてこの詩人の詩を、その出発点から、今日にいたるまでの詩を、まとめて読むことができたのである。詩篇は制作年代順にならべられているが、僕はそれらから切りはなされるようにして、詩集の終りの方にまとめられている「歌」（補遺）のなかに、この詩人が、詩をもって自己に迫ろうとした詩篇「無題」が、この詩人の存在の中軸ともいふべきものを、よくとらえているのを見た。ここには焦立ちと怒りと渇きが熱をもって立ちのぼってくるこの詩人の内部が、独自の比喻によって定着されている。しかもこの比喻は、焦立ちや怒りや渇きが立ちのぼってくる、その根元のところをしっかりととりおさえていて、繰り返して読んでいると、この詩人が一九五〇年の大きな問題のなかに漬され、ようやくにして自身の力によってそこから抜けだしはじめた姿が見えてくる。この詩のリズムは、最初いかにも軽やかな歩みのようにも思えるが、これを読みおえた時、この詩はこの詩を読むものを内から変身させるともいえるような力を揮う。この詩を読むものは、この詩のなかの「僕」となり、そしてまた「小鳥」となるのである。

僕は小鳥に似ている

餌をチョッピリたべて

巣のまわりを

日ごと無為の飛翔をくりかえす

この「無為の飛翔」の無為という言葉はよく選ばれている言葉であり、笑いをさそう。しかもその笑いは、やがて読むもののなか深くにつきささる。この詩のなかには、これと同じような仕掛けが、方々に置かれている。そしてその仕掛けは特別の工夫をすることもなく、この詩人のうちから生れてきたものにちがいない。いや、特別の工夫をすることもなくなどというのは、やはり誤りだろう。この詩人が「相対の状況と他者について」のなかで述べているように、もちろんその創造方法は十分に自覺的なのである。

僕と小鳥は似ている

たかく

巣から翔びたって

その意志をうばわれたとき

僕は

小鳥のひとつこえに

のどを洗われるまづしさと

純粹狂気や

飛翔のリミットを予感した

それから

僕に小鳥が似ている

△僕▽と小鳥はこのようにして円環を描く。そしてその円環のなかにこの詩人は自己を置き、次第にその円環のひろがりやをせばめゆき、自己を、すくいあげ、とらえるのである。この詩人のこの詩法はまったく独自のものであり、そしてそれはすぐれている。僕はこの詩集の頁を繰り返しはぐり、この詩集を支えている詩法が、一体どのようなものであり、またどこにあるのかを、さがしつづけて、ようやくにして、この「無題」のなかにそれを見出すことが出来たのである。

一九七一年 晩夏

野間 宏

詩集／皮膚と対話と／目次

序文 野間 宏

3

1 失われた夜に

独語	13
海の見える草地	14
かもめ	17
廃墟	19
八月の悲歌	20
氷雨	23
赤錆びた風景	25
失われた夜に	27
ガラスの眼	29
火花	31
その前後	34
挿話	37
後方で	40

2 地の炎

ブローグ 47

照応・1 50

照応・2 62

両極性反応 65

地の炎 70

心象風景 80

無頼貴族哀惜 87

白鳥の歌・1 92

白鳥の歌・2 95

宙ぶらりん 98

テスト・サラリーマン抄 99

ご披露のこと 102

平野の翹交い 104

3 眼の墓の底におりたち

皮膚と対話と 113

チャンチキオケサ・一幕

眼の墓の底におりたち

象徴

相對の狀況と他者について

4 歌（補遺）

無題

雨は血と焰にそそぐ

風

病床手控（抄）

制作・発表おぼえ書

跋文 佐々木基一

装幀 佐伯義郎

163

159

152

149

146

143

135

129

123

119

1 | 失われた夜に

独語

臉に

傷痕のふれるとき

やもりは闇にひそんでいる、
きいきいと啼くこえがする。

いら草は燃え

むきむきに折れ伏した。

蕭々とそそぐ秋雨の中に

それは

さみしい人格の独語である。

海の見える草地

いくとせぶりかで帰ってきた

大井町に

かなしみは陽かげにせせらぐ
水のようにふるえていた。

どの露地の奥にも

おさなくたわむれていたかつての私がいる。

点々と

孤燈に霧の降る夜、

微光をたよりに

私は崖のうえにたたずんだ。

ここにもかつての私がいる。

海にもえる灯をめぐり
背後に

白く伏す草地には、

虫の音が

たえずおこり

かつての私はしめやかな童顔で坐っているのだ。

うすい水脈^みが私を呼ぶ。

二十年の旅がもたらした

まずしい道が、

海の彼方へ

一すじの放射線をえがいている。

失われた時の直下を

四橋楼船がしずかに行く。

土の香にむせながら